

多読活性化のためにフィンランド教育から学ぶ：

マインドマップ実践報告を中心に

深谷素子・草薙優加・小林めぐみ

はじめに

近年大学の英語教育において多読が注目を浴びている。本発表では、多読のさらなる活性化を図るため、読書大国として名高く PISA でも好成績を上げているフィンランドの教育を参考に、マインドマップを導入した多読授業の成果を報告する。

多読の現状と課題

多読とは、辞書を引かなくても読めるレベルの簡単な英語の本を、大量に楽しく読むことで英語力の向上を図る学習法である。多読によって英語力が向上するだけでなく、英語に苦手意識を持つ学習者にも心理的にプラスの効果があることが繰り返し証明されており、多くの大学で多読が取り入れられるようになったが、多読の課題の 1 つは、いかにたくさん英語を読むように学習者を導くことができるかという点にある。多読の導入初期には積極的に取り組むものの、多読に慣れ、授業の課題として定着すると、読書への意欲を低下させる学生が多い。多読への意欲が維持できないと読書量も伸びず、多読どころか「少読」に終わってしまい、英語力の向上も期待できない。このため筆者らは多読の指導にアクティビティーを導入したり、精読と多読を組み合わせたりすることで、多読の活性化を試みてきた。本研究はこのような試みの一環として、読書教育・読解教育に効果を上げているフィンランドの教育法にヒントを得、多読のさらなる活性化を図ろうとするものである。

フィンランド教育の特徴

PISA で好成績を挙げて以来、世界中の注目を浴びているフィンランド教育には、1) 主体的な読みによる読解力、発想力の修得、2) 「なぜ？」と問う習慣による批判的思考力の醸成、3) 対話やグループ学習の積極的導入による表現力、コミュニケーション力の向上などの特徴が挙げられる(北川, 2005; 田中, 2010)。特に北川や田中は、カルタと呼ばれる思考ノート術(=マインドマップ)を使った学習法を「フィンランド・メソッド」として広く紹介している。筆者らは、こうしたフィンランドの特色を多読の活性化に活かせないかと考え、特にマインドマップの具体的な導入法を検討することとした。

マインドマップとは

マインドマップとは、紙の中心にキーコンセプトの単語や絵を書き、そこから放射線状に関連性のある情報を単語、記号、絵などを用いて書いていく記録のことである(図 1 参照)。フィンランドでは「カルタ」(思考の地図)と呼ばれ、他にもコンセプトマッピング、概念地図法などの名で知られる。アイデア出し、情報整理、文章理解、記憶などに効果があるとされ、読解力の向上が期待できる。多読の活性化という意味では、マインドマップの使用により、「ただ読む」という行為から、もう一歩先の「深い読み」へと学習者を導き、読書への興味を喚起する足場かけとしての効果が期待された。



図 1 マインドマップ例(ブザン式)

フィンランド視察

フィンランドにおけるマインドマップの位置づけを確認することを主たる目的として、2012年夏、フィンランドに赴き、トゥルク市のルオスタリヴオリ中学校・高等学校を訪問した。英語授業の視察、教員との懇談のほか、大学の授業にマインドマップを活用している教育者へのインタビューも行った。残念ながら視察した英語の授業では実際にマインドマップが活用されることはなかったが、教員らとの懇談から、マインドマップはフィンランド教育の代名詞ではないものの、フィンランドでは普及しており、評価されている活動あることを確認した。これを受けて筆者らは、物事を系統だてて考える力を身につけるための活動としてマインドマップを導入する価値があると判断した。一方、視察した授業の多くが訳読を含む比較的伝統的な形式であったこと、そしてそれに適する学習者の自律的態度が際立っていたことなどから、マインドマップという 1 つの手法だけに重きを置くのではなく、自律学習者を育成しようとする総合的な姿勢がフィンランド教育の要であることも強く意識するに至っ

た (cf. マキパー, 2007; ヘイノネン・佐藤, 2009)。

研究課題

このような視察の成果を経て、筆者らは次のような研究課題を立てた。1) 多読授業にマインドマップを導入することにより、学習者の読書に対する態度に変化が生じ、多読が活性化するか。2) 多読授業に自律的学習態度を育む工夫を取り入れることにより、学習者の読書に対する態度に変化が生じ、多読が活性化するか。本発表では、この2つのうち、特に1つ目の課題を取り上げる。

研究メソッド

筆者らはマインドマップ（および多読の振り返り）を行う実験群と、それらを行わない統制群のクラスを設け、2つのグループの成果（多読への意欲、読書量、英語力の向上など）に差異や変化が見られるか調査した。

この実験授業は2013年度の前期（4月～7月）に2大学6クラス（167名）にて行われた。実験群3クラス、統制群3クラスの両グループとも、受講者の英語レベルはおよそTOEIC 400点である。1,2年生を対象とする授業で同一教科書を使った精読指導を行いつつ、授業内多読(20～30分)を実施、多読で読んだ本をもとにブックレポートを書く課題2回と、それをういたグループ・ディスカッションを行った。実験群ではマインドマップの描き方を指導し、ブックレポートを書く際に、その準備としてマップを描くことを課題としたのに対し、統制群では、マインドマップの指導はせず、ブックレポートもマップなしで書かせた(表1)。

表1 実験群と統制群の課題の違い

	実験群	統制群
マインドマップの書き方指導	○	×
マインドマップの練習2回（短い説明文を用いて）	○	×
マインドマップの実践3回 （ブックレポートディスカッションのための準備）	○	×
ブックレポート作成およびディスカッション	○	○

結果

マインドマップ導入の効果については、1) 事前総合アンケート（全員対象）、2) マインドマップに関する中間アンケート（実験群対象）、3) 事後総合アンケート（全員対象）の3種類のデータを中心に検討する。

まず事前アンケートでは、多読やマインドマップの経験の有無などを含めて英語学習の経験を総合的に調査した。その結果、多読やマインドマップの指導を受けたことのある学生はまだ少数派であることがわかった(表2)。したがって、マインドマップの導入は、多読への興味を喚起・増進する目的だけでなく、未経験者に対して学びの手段を増やすという意味でも十分に意義があると判断された。

表2 事前総合アンケートの結果(部分) 回答者数 167名（実験群・統制群対象）

アンケート質問項目	はい	いいえ
1. 多読による授業法を知っていますか？	43%	56%
2. 英語の多読をやったことがありますか？	32%	66%
3. マインドマップを知っていますか？	12%	87%
4. マインドマップの指導を受けたことがありますか？	5%	91%
5. 授業内でお薦めの本を紹介する活動をしたことがありますか？（日本語）	30%	69%
6. 授業内でお薦めの本を紹介する活動をしたことがありますか？（英語）	4%	94%
7. クラスメートと同じ本を読んで議論をしたことがありますか？（日本語）	22%	77%
8. クラスメートと同じ本を読んで議論をしたことがありますか？（英語）	1%	96%

次に、中間アンケートから、実際にマインドマップの指導を受けた実験群の学生たちはマインドマップについてどう感じたのかについて見てみる。マインドマップを利用してブックレポートを作成し、それに基づいてディスカッションを行った直後に実施したアンケートの結果が表3であるが、全体的に学生はマインドマップを肯定的に捉えていると言えるだろう。特に評価が高かったのは、内容を覚えたりする整理したりする効果で、8割以上の学生が役に立ったと答えている。考察を深化させたり発展させる効果はそれに比べて少し劣るものの、6割以上が効果を感じている。自由記述のコメントでも、この数値を裏づける肯定的なコメントが寄せられた。ただし、授業中マインドマップをどう描いていいのかわからない、難しかったという声も聞かれ、指導上の工夫が今後の

課題として残った。

表3 マインドマップに関する中間アンケート 回答者 79名 (実験群のみ対象)

マインドマップは...	平均*	1	2	3	4	5
1. 話の内容 (あらすじ) を頭に思い浮かべるのに役に立った	4.23	0%	3%	14%	40%	43%
2. 自分の考えを整理するのに役に立った	4.12	0%	9%	8%	45%	38%
3. 自分の考えを伝えるのに役に立った	3.89	0%	11%	23%	32%	34%
4. 本についての考察を深めるのに役に立った	3.95	0%	5%	23%	44%	28%
5. 本についての新たな見方をするのに役に立った	3.89	2%	5%	28%	35%	31%

(1 全くそう思わない、2 そう思わない、3 どちらでもない、4 そう思う、5 強くそう思う)

*5段階評価の平均値

最後に、実験群と統制群の事後総合アンケートの結果を比較したところ、表4で示したように、各項目において両者に有意な差はなかった。同じく実験授業後の総読書量や英語力の伸び (Edinburgh Project on Extensive Reading のレベル診断テストを使用) も比較したが、両グループに統計的な差は見られなかった(表5)。

表4 事後総合アンケートの結果 (一部)

	実験群		統制群		t(161)	
	回答者数 74名		回答者数 81名		有意水準 5%とする両側検定	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	t	p
英文を読んで考える力	3.65	0.84	3.64	0.90	0.80	.94
多面的に考える力	3.46	0.83	3.30	0.89	1.18	.24
英語での読書習慣	3.33	0.96	3.37	0.88	-0.28	.78
英語読書への興味	3.84	0.93	3.68	0.87	1.10	.27
課題の量が多い	2.89	0.78	2.79	0.76	0.81	.42

表5 事前事後の比較

	実験群		統制群		t(161)	
	回答者数 74名		回答者数 81名		有意水準 5%とする両側検定	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	t	p
総読書量(語数)	80519.49	189669.60	62057.06	49012.12	0.87	.39
EPER 事前レベル診断	42.13	9.76	39.12	12.55	1.71	.09
EPER 事後レベル診断	44.33	8.39	42.05	11.81	1.43	.16

つまり、マインドマップを学期中何度か導入しただけでは、授業終了時点で多読に対する意欲、総読書量、英語力において、マインドマップを使用しなかったグループと統計で差が表れるほどの変化をもたらすことはできなかったということである。しかし、英語力や読書量の向上に直接結びつかなくとも、マインドマップを学んだことによって思考整理、記憶力向上といった効果を実感できたという成果も忘れてはならない。総合的な読書量の促進という意味での役割は弱いが、マインドマップ導入の意義がなかったとは言えないだろう。今後、学生の意欲や読書への質的变化など数値では測りきれない効果についても学生のコメントなどから分析を進めていきたい。

参考文献一覧

- ヘイッキ・マキパー (2007) 『平等社会フィンランドが育む未来型学習』東京：明石書店
 ヘイノネン・オッリペッカ & 佐藤学 (2009) 『NHK未来への提言 オッリペッカ・ヘイノネン：「学力世界一」がもたらすもの』東京：NHK出版
 北川達夫 (2005) 『図解フィンランド・メソッド入門』東京：経済界
 田中博之 (2010) 『フィンランド・メソッド「超読解力」-6つのステップで伸びる「言葉の力」』東京：経済界